

8 7 6 5 4 3 2 1

20

8 7 6 5 4 3 2 1

JAPAN

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

TAMIA

8 7 6 5 4 3 2 1

2m

1

0

大正五年六月下浣起羊

特別  
14  
1919  
302

雙人恩重如載

九十三

准文魚星日軌五十三

大正五年六月廿四日起本



○ナム田中松城写三毛の久松保険協会ニモ  
ニ祝富と催す鶴川總裁よりおもて手書四甲  
箱城之年華甲ニ丁リ章面同上號之長  
左親三十一年初の弟玄帝大門屋圓吉被  
長生親ニナカヨリニおもて手書四甲  
ナシ箱城武場にて之賛仰と後まんニテ  
ニシ念名と號之終て之家名と稱す今  
是七十九ひまうす集山あら賣りトドハ  
総裁の福助と係る三難九杯と名け得江

この流氣り跡也余はあ處上一坊の便後をぬ  
すよ家左の

今又と年の祝いとまよおめいがい願ひあり何う  
御祝詞と申上ぐべきもあまかく言ふと自分も  
年祝いのとあこ出るにといつて躊躇する、  
自分と田やえもむむ物祝年と云ふうくまん  
ち年の経りひあまく、どうせ人をち年と  
えを是すんぬと困る、何う年祝いのあり  
毛利く出と朝食の元と或する極る氣う  
しれおもへるくいりつむや一つ考めれり  
大喜の意厚に临むたれ何れ互と云ふう遇  
度る無んとてこそ、本人の印を曰わる

徘徊のゆゑと身をひいといふてぞる  
自分と節とれむういれ、ドンナ心地花田び  
そんむ事とれつゝもの、自分も七十  
二歳一歳らそんむ氣のう生まつてあ  
かとゆひりうとる像、恥づりうじ  
そんむ氣とれんねど思えううじ  
じうも人の年祝いとまよとのうと自分のも  
とむや能くとれ日も氣のうじて餘りはよ  
くあい、とえくとくの祝いと目出も思  
ふ田や、留まへるもひあまうじ田も段  
も音でうそと自分もよも遠えに生參  
ひあす既に田やへて年祭を自分もも多

く長てすつて松毛を遠く生むるを知る  
と自らもお身より、志のうちひまわ  
くめぐらすむかひあら、左隣木の下りと  
そええ又多(よ)きまちうるを於てまみとせん  
ひまうるを往く年(と)のひいじのと祝すまの  
ひまうるを上(あ)上の壽( 寿)を祝すまのひまうる  
ひまうるを身(身)も氣(氣)も停(停)まらずに嘯(嘯)詩(詩)  
まえ立(立)ておめでとくありますゆひめ  
私(私)も身(身)も氣(氣)も停(停)まらずに嘯(嘯)詩(詩)  
さん後(後)の賛(贊)がわの能(能)をえんじゆま  
やくあらゆる併(併)し三十一年と  
元(元)亨(亨)長(長)いことなくありつて三十一年

二十日未明の間も飲まぬ、此病  
初めより何氣にあらず、是故の内  
に之をお詫びするが如きのひま  
れえ主ある人あり、少しあつて  
つむぎあつた。其處を冷思と云ふて  
いふ事ある。

まわゆる事ある事の如きも全然  
けつてゐる。因も破ちてゐる所  
まことに二十一年三月と  
おもふ。さうしてあつたのを  
かわゆる事ある事の如きも全然  
長の歳月を一日のみとし人全の生  
を以て上を渡

頃まことにまことにあつた、うち田舎の事  
の如く社會を認めたるに近づいたりもとあつてか  
りまことにあつたの勢力の結果と謂つてゐる所を得ぬ  
又也御おゆゆの人のう因ちはは庭の所の廟ある  
を敢て詔じて居てもつて又あつたの日天子と云  
先ゆきよもんを謂ひがのうもの自分のことを云  
ふことをおこなつてゐる。更にもうひとと  
年前高野某と羅刹高波久傳泰之助の如き  
も早朝の五時から六時まで勤められて初め  
用事被長とあつて其後は伊奈家と連絡す  
と前立の内々自らこそりとアリ田舎の娘お方  
がいふとあるので、其の如きの如きを

つらうとうと、おまかのたまごをうて、おまかの  
こまくまでとくとくとくとくとくとくとくとく  
ナシシヒキを鉛丸をもとをもとをもとをもとをも  
ぬ味うふのゆゑと思ひ、自分を重ねぬまの  
勤めと拓経し御みと鉛丸をもとをもとをも  
れども老いの鉛丸を重ねるは、寧ろだ  
よき御丸ともあらまことまことに  
ぬ生ひるを承りて、と重ねて、源氏ともに  
お用意せ候ぬと勧められて、お次第へ  
えむ四郎のあひえりの風となりあくま  
う、雖有いき方りうる、幸う、不  
幸う、うううううう、わ  
玉手のあゑの

お化こかじの方も大うる、ある、感心のゆき、  
うとうことう自分の一例と歎うる所、現る  
ふれあはれの思ふ、傍の寂哉、うゑのゆき  
祝が聲を思ひ、主に死んで御もとを意味あ  
ふす、い自身、う傷情の因紙、主ふをまよひ  
清しゆんむき

家に在りて是れを以てお  
もひてはあらう。此の後  
かくちゆうじゆ珠子のあらう。此の祝賀の  
令月、伊豆守の日暮下の地の珠子を祝す  
事なり。ひとえことのいふよろこび  
の氣のあらう。是れを以てお

の上に三うさぎと教わること無  
其の傍らをまづりんまじゆりよジミ一方るる點  
らし今も様の下の事わが一生せす。福のよき  
幸くもいぢる不幸不遇の境遇を経て  
ば父子と一般である。今もまた  
圓母陛下の乾總を祝。一中主は自ら  
社をさめあ役を代まつるある有の祝  
④賀くらう役金一札を奉り候ことをよろしく  
く減るおもへりういき遇とえのハジル  
るくとも母の圓母陛下のゆ、總と  
とたに礼をまつせあ役の津株を祝。一  
まをあて病状に感する事ある者

の御子を志彰として他の大内様にちくび  
くして年数に於て形をあえて徳くく人  
ともも彰すること又あるものであつて、竜  
の事、お方をも一層意味の深さを以て  
つむづく後も此處アリ斯景より之見  
え起つてゐる人等とのうそうもうう滅  
ス後後もアリテアリアリアリアリアリアリ  
の児童中又みだれ相撲を喜び弱りありす  
弟を育す習わざりと婦妹と産む後  
前く三院を育す四無くして大悪にあす  
内道退弱ひてすくて殊々一金を遣通

おれの習ひしものと云ふは必ずの事  
往々杵屋と申すの門に入らるる者、今や是  
追とおゆる入つて御室の物の如きも  
あらむよ。浦川、喜山、松井、大内、新見など又  
自宅にあつても修理、志士、子供、お歸  
を教へず而一之以て之を修むる所、いと漸く  
割改の意す。況又是道がまのれか  
埋玉と換へ。杵屋、一つの事ぢよ  
り手あたまづけられ、づ垣の、新見、う勢  
大を知らぬ。年数と十年、技術、也しく  
アレハシミの、新見、其の、業主ヤ全、杜折  
ノ日暮御油、も頃、詠え上流、私に、

行ひよし長のりゆれわら路歩くにかきつてあら某  
の事今朝起ゆる吹んを破却するに心せよま  
りありぐじと御てゆ！ 鋒落す金甚多く多々  
と汝よ六四らゝ潤下しむ六心ゆ里あ取れ裏  
城きくハ枝を此とああめの城とを一ゆすもふ  
まみゆれらこはきくらむ不の手とと之れとすき  
某まち人ままく今す往く道しりしおまく其を  
きゆくもあたひり終く氣をもとまくこし山の前ま  
え六四印祖父のえうしゆゆ次とまくか跡界すよゑ  
きれえし難事のじよきゆくまれもむ都のものもと  
ゆきゆきと紀王而て余をもれや附記を免るゝ能  
りす因らきく余家もじ一紙多く出せん

但  
而  
指  
之  
也  
竟  
不  
知  
其  
所  
在

二味線「四郎治」藝名の由來

# 「口藝」の由來

蒙古文

ある廿八、九の兩日有樂座に催さる、長門研精會の「勵進帳」に三味線取つて三枚口を効むる吉住四郎治、初めての番附名にて四郎治では親しみがないが實は早稻田大學の元老市島吉氏の令息昂君(二六)の假の名である、昂君が吉住六四郎の門に入つて三味線を稽古し始めたのは二年許りの事で初めて

▼ フトした事からの戯れであつたのが其天才的△

妙聲(せうせい)の六四郎を驚かして遂にこれが本物になつた、一度公會の席へ出やうとしたのを嚴格な市島氏は藝事は娯みにこそすれ舞臺に出るなどは以ての外の事を容易に許されなかつたものゝ市島氏も昂君の才分を是認して「三味線はいゝのを持たなくてはならぬ」こ三百五十金を投じて支那からわざく香木を取寄せて作らしに見事の

二味線、昂君喜ぶまい事、  
▼何うがなして舞臺でこ  
心懸けて居るこ京都から▲  
上京した湯浅半月氏が「出給へく、跋君  
の方は僕が引受けたよ」と大に後援振を示  
したので昂君力を得て折柄の研精會に出  
勤する事となつたが名が無くてはなら  
ぬと師匠に相談して付けて貰つたのが吉住  
の家に粗末にはならぬ名の四耶治である、  
愈舞臺を決つた時折角立派な三味線が出  
来て初舞臺に用ゐるものだから銘がなくて  
は不可ぬと其銘を之れも半月氏から坪内遙  
追博士に頼むと博士も「知人令息が目出度  
い藝術の首途なれば」と快諾されたので  
の藝壇にやさしき一花咲出る事となつた  
のである

新嘗のうえの初めのうえ  
二月廿七日  
大典のわが御衣冠あるふか  
あまくまよ思ひてまつあ  
天皇の宸廟ひこうじと云  
傳承あるわが御上一帖生改  
えどり之へと事内次  
え元皇の御行動といふ

此身はよきものあつて病氣をもおへしと申す事  
病氣も行ひのめも能くうひつにあひあらう  
ち登りて遙かやうにねどもとよと見こゆ西  
御の城とえふとぞまほ詠きんり玉のゆゑを  
と凡その下の主つてありてありて上五  
ちるのをう徳地のやうにせりて隨き事あてれ  
往くあまことすけうじとくうじとくうじと  
凡そて間まわる所の底場をもあゆう草木の  
の根根地の根根修あく、解じぬかとく  
うの通じて飲む共き事あてれ金糸の根  
とまよと理り無きよかく、すまへ

聖書  
福音書  
新約全書  
其傳

但し福音全書の御言の如きを先駆けし事も  
考へ出しあつて故と承うしをんとすまむ事う故に  
舊約全書と家業とせりより多くある事也りし  
サハリサカルエヨウ多の研精考究うちの初見の事  
也

(六月廿七日)

の湯宿山背の旅にて御大典の御席と宸翰あるかの  
結果をあざれう様に洋山をまくよと思ひて之あ  
ウミテウニシテの天皇の宸籍ひひうどと云  
ふ東西南北を走るう情狀のわが之一帳坐床  
さんさうとぞとぞのまちゆきをもとめゆきをせゆ  
つてゐる事とあふ事とせり之しき事御許さ  
あらゆる事とあふ事と元皇の御行動といふ  
一か

の事は何んとぞ此の三法の事と申す事  
とちがひも源をもつてゐる所ある  
まへりとて之をかく其處に至る所を  
おもて前例を考へておひあらむと  
おもてこととぞ

あくまし丁度もレ初様レ  
松葉部或は聖なる色一大此  
例のうよ仰り候事  
別にうひある候事、おふかや  
ひのふあひのま  
おほひのゆ  
ヨシ高めおまくアホアホ思ひ

の事より沙汰する事と  
あ辰の年を又こうと記

道の又さう、ひんまく、おきはるをふ道  
心浦は中の船と、先長頃と志すの初  
の河もとをさきくとおはりと北山え  
か千歳の港をもつて因縁をもつてあ  
す、其のまゝもとをゆのと弟またの又  
船を附するれども、往の天外、此  
さやもくよ一ちどとあります

大正五年六月井川あります

○かね根却元もさき二三の處も多めとさへ出づ  
中に大隈言道自布トの左全集四季を既ニ  
始(アヌ)ル、あとは極端にそぞろう實あれ  
ルが、何物か言ひて荒唐の人にいはれ  
ておこり、お和殿をつけておこり、又不治の人  
うともお車給、まことに傳へておこり、此二事、ことく  
豊富に墨跡を残してゐるを得ぬ事あるた  
の一首とねす

あきとく  
むくめ  
くのかいつくるあこは  
り、うなづくよ

日本正午近傍有檜内道路、近づく一角に、あるて建設  
中の前院の男爵の壽像設成を先づ除幕式と  
奉行し、板の面を三枚中より下の降る所  
にて十二時を会同して其記念代りし余光づ有病  
者一前院あり、開基の挨拶をす。未度らむ  
あ大の本意をす。予も心ニ、御詫び除幕布の  
式と所のまつはことを謝しに自分、挨拶する  
九時半別に御す。ものゝもよ無いつゝ也一事  
御す。至るべきを左のままにんまほ此壽像建  
設のゆきとせ年十月男爵を向くに壽像堂  
上に移もあ紀さん即ち妻と全却に無しと  
する建設費を奉り得れ。此事實也これと

細像建設に従ひ。のすかあつて先え男爵の徳  
の如きをひふ不、以てあくことを細像と設和め  
て主不味あり。シテふ數えを間まうまう地の  
細像の特徴とが揮しに結す。ひあす。場所内  
のほれ多き。移る修りし幕と合ひ。どう  
切つて見よ。仰きるフロツト家の主庭の木堂  
タクシ。既見る。朱ふ心や。こひゆ。わざうし  
自今と。い。初りしえ。ぬくする。其の心の如き  
故照し紫翠木と。まくすまのあくし  
北條の山家と。新家。比。うし甚もの。彼女  
らニモ高士伊藤忠太氏の手す成る。まとことよ  
むうを。上出来と謂ひ。手しや壁乳。室氏武

まくおの祝辭あり大限首おやりよ男寄壯  
時錢素而代賄革とあらざるもあらず  
を宣揚する所あるとあらし御内侍のもの  
併じ常貢とんじるより御内侍のもの一言無  
き能いやうシテ脚アプロツム外文ニ清鏡  
す前略の方とお絶り謝辞ありし日出・お  
式をうり

(大正五年七月一)

山東支那のためみく、御内侍の遣役  
を合つて御内侍の御内侍役役の御内侍費  
の奉集：まくの御内侍を身に附けたる爲  
ま成ることを、御内侍の御内侍として  
お内以上の二度おとと一枚の内々集ま

幕集：内と之を合せたる御内侍  
元初三千円の支那と以て之形ひうの本  
身像と化んじたるより三倍以上の規模  
毛皮の毛皮を以て年均く一千成り  
リ必竟内とあると相傳えられひう  
此の稀なる事かと見えども所謂の  
味有り物はとて北極のものと云ふ事  
下

御係費除奉式會と降りて、お義子の御説  
あり、場所はまだ早稲田のうちで、寄附をうけ  
云々。——か御係の内用で不まじの将とん  
路入と通じるのぬ島要す。あれハハル角  
の御説。此の件をうこえこととす。——し  
と金もと御説。——せうもとこあす

北里役に就き。は原家加らし。努力  
（終）始終一貫執り仕の者也。——  
頼不ま。——うう。——は原の馬志娘セヤ  
を得國々也。

前鳥翁八十一年、此年壽誕の折に比  
まわは他本印つて候るまく。式の前日謝

御上り見え第局へ詫問す。都の御説す。  
え氣。四十一年前とまことに。往來行め。  
く心えうと思ひえよ。

のむ。因も納く。身を湯浴。身を洗く。そつに京  
都の街をなぞ。湯洗ふ事も。あるすまつて  
て身立ても。そつに。身を洗ふ事も。御説  
代の技巧。二種の技术をもつて。そつに。いじく  
漢経をも折し。因も。身を洗ふ事も。苦心し終  
身切るも。もつて。身を洗ふ事も。二面。摸  
達津鏡をねた。——のどを。——。味鉢も。味  
刻體制。どうぞ。事事。模造。——。思ひぬ不  
どう。生れ。——。此後。水をも。湯洗を

奉書すより内説を書きし上手一にのびとうする  
である、年既半を四十ニ四年経のにひ人名の下に  
へひある

(七月四日)

○此報仰りのとく方限伯郎に手稿の存候  
是處とふらして、仰々度あるの様子のひある  
うお角あねのほんとすりのあひあるも  
食事上向の湯液をとよし所、仰々全う  
汗酸魚唇あよい化念る業これき湯液にて  
言葉の風りを捕つて一坊の湯液を試みえど  
度方びらきをうけいつたらしもあ生來してあら  
がちく（紙軸の價値のあつて、仰々又成府  
まへきと別にするとのああはう興いゆゑ

先づ人の言葉を風と捕りて之を狂うてう女  
あり是れトニあひゆわあつて事柄や而今一  
人や其人の説をもとコ子会へせし巧み漫  
説と傳めるぬ、うちも、此々べし一派をうつ  
てよりす院玉嘗てのうやとせば黙つて印がた  
タガーレンのうりをと○巧みゆるあり今モ西洋  
の物質的文政と称揚し早鶴に於て科学研究  
の為あと後えんじ、タガーレンとせよとひうもの  
の人とアーモンテアヒトヨリ西洋の文化と  
學ぶ校の所、もうつてしまひやあと主張云々尤  
其の後へ身と假りあへきて、動かさんと相和  
て保守説を煽起したとす但向あらを嘗て試め

す本院を考へての所見で出處しては海の不候と云  
ベニシ林の内に況て井上哲、うりうりの後而  
モトノノ事より是を哉の故也。所もあうとう  
と嘗て内公うむを多ひ研究するの多く  
遇びてうるぬをうるぬがめつけたまを科  
学、神究のニテ丸の真言を有つてえくの  
馬う切須と詔教してそせ後日より  
行んじう而もうろきしもと、うまくさ  
アミシの内中、御馬士も代り、御馬  
の御えと渡船する浦え橋にて湯ギラ  
とよふことき酒わうて詔教とくとくサウハ  
リ。うれし、うれし、うれし

心およぶ思ひれども、赤保22科等、若  
て自らの理解力うきことを歴こさん  
じて、而も科等の事あるだけの事にて、うむ  
まぬ獨りの武道を義とこなし得  
キも獨りの科等の事ありて、得す  
も、かくはんの科等の御えの堅めゆと詔教と  
ゆつて、ゆくとて、御馬院の御馬を又、ゆづる  
うめの御えと御馬等の事あるときと  
ゆくとて、又、御馬院の御馬を又、ゆづる  
を試みる事、難むせりの詔教、うめを

ひきつて此點をまことと取扱ひゆゑ  
ひあす

七月四日記

○考一國々あつては凡ての事は御ある事と  
を爲さんとあるものも凡てある。うきいとさ  
不自由と云ふ事と云ふ事のあつてありむ。  
種々の事が歴代の事と御敵と拂ふ事無  
りやうと得ぬ、何せともよ大々に威化と社會  
と進んで結果、きのちもこありてある事。うきい  
世々實行されし事の事とうきい事と  
うきい事と進んでゐる事とすれど或る  
けれども實と云ふ事とあればうきい事と進んで  
ゐる事とあつてあれば一代と云ふ處とある事。

あつてと云ふ事と思ふ事の事と、監  
獄の事と云ふ事とある。うきい事と  
の民約論と後でいの不義の事と  
云つて  
○考一亦又せうすて浮世経と云ふ能とい  
うく改やうてナガヒの浮世経と云つて  
名つて云うと云ふ。自今を前後  
の事と云ふ事と大なり。凡てを  
進んで浮世経の人うけんと云ふ事と云ふ事  
で云れ考の事もやう方面に行かでたう威化  
の漫潤とをも見事の豪傑のこと  
をつねりあり。誰もも氣つてうきい事と

のひある、まことに萬世傳する成化力の大なると  
事人、心の物の徳を揚げて、  
のまに能くまよわつて不思議で、  
きもあくと毛毛と改めしれ。七月四日

○生物多るの研究にて、章魚の生殖作用を  
考ふるよりある、雄性の生殖器は、元々交尾  
と繁殖の生殖器である。男性の  
章魚は、脚の粘液を口の手足につけて、それを  
せの章魚の生殖器と差へるものがある  
が、こゝに、また、女性の章魚は、粘液を  
自家の手足攝取する。其の手足、自ら身體  
を離れて、其の雄として、泳じて抱く

○また、世せの生殖器は、觸手と精液をやと言  
へることより、是博士の生ある海老義とぞ、  
をも仰りて、術を以てしておなづく後、改  
名とす。是とすと、其者とぞ、  
の触手をもじのせ、而して、精液をもじる形の  
の支局とも、タリとも行ひ、充てする。うき余  
の種も、往々の意見をおひこと、ヤマレキ標送  
日本社・さうのと、異よつて、標送へども、  
つき金うち、行ゆるゆうわん、  
のタリの上、傷石をもじ、へしと、筋の毛をうけ、  
うきのめをうりと、一網うり、のくじけんづや  
うきのねうとほんと、おもろいと、おもろい

可矣。一き點も落さず、妙詠  
五段目へと進む。但し称  
呼す久耳も歎し且つ音節の可  
能性と妙す。改  
制  
新  
ニタ刊の事  
これと  
同上文相とす  
前回の所  
也  
呼ひや  
江陰や  
ゆゆす  
詠みまの  
い捨あ  
とえか、平丸  
あらんし難丸、あらん  
きぬく海の。つけま  
平丸も成り  
人ふくまんぐ令  
し得の事

○本の事中西先生の内と大之前  
の男はねえ。納得せぬ也。新  
謝紀

とえれ故意也。自多生作の今ま一めあらばせにて  
し恐れ一にあめよ。男の在年幼内に没け見え  
此後不思男を三十方迄酒詠と交ゆ  
物をと得て自身からて亦のくに男とぞき  
は狂歌と酒詠と見えられ。初徳の主没  
まことにかく心かのうと多くすむあ  
とえ也。どうぞおととよりのくにまくお  
の事よとと二枚御手本黄紙、見るにうら  
大正九年七月四日酒詠とあひて  
中西邦繁とて  
立候。既に其出一丈庵

市内契とします  
吉萬のまやと申すものと思

鶴爪庵

男と詫次東京よりやむにじう暮され、どうふ、星  
砂耳てめのうをえこんとうつる、きみがお見元  
さまと約す、苦難のよきをあへ得度の心とえ  
へし食事、誰かとまくらをうぶとえふれとえむが、  
てと困ると食事と叱る、自尊を傷らむと食  
べりふくらうむえりとえひ、せひおどかくい  
ふせんく自慢をくわにまくほひあくと一笑す、  
はくせんく意極のゆゑのとさくしてどうも筋  
あじとく、えす牛の鳴をかくと嫌能成

まう、北斎音様とぞ追合つ即ちやニうい即が  
人ともあらずもうち、りくく真面のそよぎ  
ゆうすすめし幕下集の物況うひと鄰に聞聞  
男のあらうととぞ云々、男も漏洩ともうり  
く、れいゆうキカン氣のゆゑ、一于人のやうな  
のあをさうやつれ、あひを被れあつてあひ  
ちかく震懾うむあたう、ノノ資産を手取  
ふと云ふ事、ひとびと修多、食を喰ふ(ら)  
核が強まる所る詫うあひとうづく、男の  
わうとも目先うぬく數うあひ(こゑ)、  
りうの仲氣の件をひそみとくのつる  
つをえさひうぬ、北の仲氣の件をよくべひく

すを獲するものよりるゝものと角立つものなり  
と考へ出でる。又は、海岸と販する事有り  
利口の人と云ふがとて考へるに一つ即ち  
是、自分もも甚ざるのあつた。開拓も地盤  
造成也いあつた。日向と一とれどもさうさ  
うと間へて退居する所を閑散う取  
たる者多く行くことある。日課  
と云ふてもぬりひつりつりや豆面とも自  
傳をかけと云ふ。又おなまと一日布半と  
ボリくをうててて、又おなまと一日布半と  
把つね使ひわきけのこともある。先年額肥  
を打つてことありあつた。されうる一筋記憶；

萬葉うつてるゝやハ海べゝゝ、國難  
じあらき、波々々々、日待をめらとゆき田代の  
雪や母毛に生まつてと云ふ物をと得しを  
すめ。日、福也、益田やを保有すあり。高麗文  
あらあらえりや、や、と飽興よとて、楓谷海  
活ニ者を滅ゆく事無有。うゆ原ト傳；  
武尊もとすが一あくある内道と云ふ。  
二回目のや村仲花主身活勘手の  
役と云うのことを形ス貯めのむりうき役と  
いふ。仲花も身死するを云ふ。海活をそ  
満生の供體を備へ。其名は日本船犯種  
をあせり、酒と血とあへたることも。

く酒入人の傍より餌子をねし待ふとおもひ  
て可性無論と連雲舎の和むがゆかゆせられ  
謹處處を處在因えとれキよ聞かるゆゑを  
談ちく、うどうそりのえ氣熱々とおも年  
のあらま玉葉十角あしり、中四日うりうく  
の迷懐は自人より音よ菌校は思ひもあきらめ  
て、自分のことさりういへらうし御も教うき  
が、也く前身生業までことを美意がふむ  
あく紅々あらまの、又自命をしきの境遇への考  
ふたん御もしわよのまむほもほも後生も  
恵みぬくうれま氣うつすまううさんも前生も  
ぬくも済みうひありつし、ます音報である

急と菌校は因果本報の祀をあまじんみう  
も慰めとくもゆかゆの仰り真面、泣きよい涙  
びとくに涙う少すか、一いこま冬十二月の  
神をあまへてゆけ家へゆつる(七月廿九日  
ねづる)とある(寶山)の(木末)あ(木末)の(ち)  
○の功上泰平雲林木末(木末)の(ち)と書(書)とも  
十都(十都)の(木末)の(ち)と書(書)とも木末の遺印と顆を  
持つて一巻を高(高)すすめ示すものあ(木末)の(ち)  
京作(京作)と湯籠(湯籠)と載(載)て(木末)の(ち)と書(書)とも  
(木末)の(ち)と書(書)とも(木末)の(ち)と書(書)とも(木末)の(ち)  
是年未(是年未)の(ち)と書(書)とも(木末)の(ち)と書(書)とも(木末)の(ち)  
地(地)況(況)す能(能)うむ(木末)の(ち)と書(書)とも(木末)の(ち)

致仕後は、（相手）の間を往来する事多  
く、掲げてお省院と申す。木米の印  
私入る容易に得るのである。未だに印譜を取らざ  
無事、金の印譜や北一等湖  
六湖くらうも似たり即ち彌いへる事なき  
五年七月二十五日也

○余の家に三不思儀あり十年在寺下りて破角  
お供あつて僅て三十日也。其便を拂つこと  
ある事無く、（之）を必ず右腋下に寝ます。又  
二三ヶ月更に而ても此の比肩もさへ客多  
き家也。而て往々大官人自動車と並んで本  
主有りえ一不思儀も其と故者家じす。

○後年の一部に絶交、断つず。ニルニ不思儀  
盛大の池より夏の桂樹生え、起り據て爲  
つる。術路に行人足を駆のこ耳に化く。又三  
不思儀。○物のぬきを負ふの土花に、も西骨  
董え填す。もふ不思儀の一物のべき歎  
三十年俗に家生治をつけて、今ある女房  
過ごす。もふ不思儀の一物のべき歎  
早稲田作主の田へ、此の三種の不思儀とい  
て研究者多く來りとす。そのゆゑより後援  
金を設け、此期とえ余の家に常て往来  
する人里思ひのありしおどさん

ありの後事多と云ふ。又ノハリ家を飢ゑ  
みすべくと三木武を真面目に先へ  
余戻し噴飯す

○余の控あら屬す早稿の大字記念を車資等  
三十萬円を移持して募集と始め立派に五十  
三萬円に上る。而して此多苦らずとアヒと得  
つたり。又テ今日大隈邸にて枝の評議會  
会員なるより募集の收穫と報矣するや  
併えの某アリテ荷主款と起りニニ院二  
十枚焉ル而して高麗ノ切を为さりムハ  
んじや全四ヶ應募券の相率也。漏々とも相  
輝ぐハ例ハ多々紙きく就くハこと。記述

の勢制す可也。唯防護之んを支ナ  
諸君安んせよとの衆共期。 (七月二十日)  
○七月二十日某時、此昂昂の意見持内も(井上  
原重)立高根、其人池田、一田、野中酒井、谷  
湯川、吉田と相約す。以ゆかば、此味を  
人を遣ひ出でし今ハ才人也。且つ、以て  
人を抱まへキ人北ゆきも、と云ふと至る。  
児童にて北寄田、(北)交のうへたの如くも、  
言ふと云ふ。あお島、(北)井上山の酒井、(北)良  
三名とも、即ち、猶も、めくらうり、そくも、  
もくわつて、のうども、めくらうり、そくも、  
もくわつて、のうども、めくらうり、そくも、

の音頭とまよひ歌謡傳承代ともえりて歎き  
いよいよ老いた距離感等は吹きぬけたる今  
の手らじ歌う御も中、ヨリシニヨリとぬえ  
●未二西伊豆と家の玄室を行キ、又シ前田  
以子と申すもの章へくありす、山房  
而て丘草のゆゆくゆくを十之三の事の  
身うすすめのものあり、四十萬石以上  
がまく流れにて鷺家の大奥、今よ山  
本も化實さむをめざすに即ち左を取  
むと云ふ

第二回 御仙臺伊達家品入札落札表

東來西去見面時  
不以爲偶縛不離

東家西客見面前  
心心念念傳聲不虛

元	札
京	東
田川	中梅山
谷部	村澤澄
弘利	作次安力
吉吉	郎藏藏
都	京
北土岡猪	今服井貞次新
橋嘉兵衛	七兵郎助
三郎	衛

戸田彌七  
大山中吉郎兵衛  
春海敏七  
植村中興七  
阪山平兵衛

落札金額

大正五年七月五日

(非賣品)

の音頭とまとひ朗俊竹代をその匂く歌ひと  
いよいよ一と距離をすくぬるゆゑに今

回二 嘴 薙 品 人 牀 蓋 牀 美

の雨暮松浦式の印のみ 一日の印の汎の行ふ  
を瑞瑞收へ附しおう余一本を差す、前年一  
年もかゝつて刻し終つてあるべく見えども余未だ  
足らず次の法書等の矢印あらぬのれ、諸事  
之處ふた度も未だ也利る汎る印の印譜を  
取りて是の跡をとひて其行ふ某  
家へ在りたる點難い可きこととぞと其の望  
り既ち有りて於て在りて瑞瑞收へ附しおう  
あ一二段とそぞとそぞと其行ふ某  
跡をとひて其の跡をとひて其行ふ某  
家へ在りたる點難い可きこととぞと其の望  
り既ち有りて於て在りて瑞瑞收へ附しおう

十七日と一日と二日と鷹尾のままで印譜に以  
てあり布宣用し、うるまゆすとあくと緋色  
同じ例つべ。一方：榜體一ときのもの也。  
榜體也。一方：かずかず。雄黃を施してはる  
い。雄黃を施してはる。法書考今之  
言ひ。本重不思議とぞ。印譜をば。印譜をば。  
詔書にちりとある布宣をも。一言と云ひ。印  
いと云ひ。かく記し。傳り  
印譜を般行しこそ。内好不よれ。と覺え  
て取手

る印方印を。勝庄江利。松浦武のりとある。一  
ろいろ印を。湖口。等文也。

山青殘月落燈白古柳寒橋。君人未過滿耳  
水珊。

昇官は甚早々。而は課印士ら以人  
百詩載石顆

昇起自年。氣零威少。劍拔心荒。而  
流多井。抱多愁。

命信汲つ井灌。相過庭。仰天。乞日。如落石菖蒲。

朝露家百葉。秋露四彌漫。伏思  
四天子。聲高五。補歎

紅葉林青嶂

多情處或至心破也余鳥每晨

出  
林

曉

果了輕日出未遲輕亦峰一莫乃少

志是乃少

少

世貴口中密煮茶心思深終古無人識玉泉嘗苦心

男子雪臺裡不穿一裘若誰何光車歸

除亦更

不

文嬉到第九轍似捲風濤刻雕喜明快

不惟君磨刀

韶風猶料峭殘雪擁山城今曉賣花去春生滿市聲

霜月映峯竹空折大寒家山此景最合病丁詩有

予人初定寒留吐吸東籟絕風雪歇遠窗松竹起

回雲捲城而北覓冻禽聲

松竹立夜雪裏點方巒鳴

并宮商之音九十九九詩運刀不忘就一墨了文嬉

驩然引太白一百深成以實詩五福而狂

歸蜀天涯

題

移來白氣萬重雲海空丸然栗葉  
宿人同我一寒冰有赤雪前山  
白地白如銀

曉道

頼君鴨屋游寓我江刺松浦天雲津先生之雪  
晴君側好篆形百余契庚二君曰二天戲以一日若  
為百詩百顆以送於此我儻圖幸矣二君又存  
鴨雪之言不可不書二君故許謫以十四言會家族  
氏雲石樓未唯里時在小寒日晷甚短忍非一  
日朱爲此日午後往觀名之爲五十詩數十顆豫ふ  
立詩題豫不捨篆文而墨抽古印譜命字取題筆  
吉刀乳竟玉初更而成寒文壇一枝哉也元美  
因以贈買母者見者而要其然乃而生此中  
予許身多之矣辛酉年秋錄於可也

弘化丙午十月十六日江刺高義通款

○是昂前月長吸烟持今に登壇一以之をもまみ  
と余聽くよしむすれども、七月十二十三ありて  
登壇場あるも、ひそむて、休耕めども、此双記  
のじいび仰て、臨日ありて聽えんこととあ、御  
よりを考らぬ幼うことを放失すうことある  
接みうつて、十数枚せし行きかりし時の板  
と移く、うるを看保むこと解らず巧拙又批  
評の能く、唯をゆき临ひて意をせり  
或はとちりようく、巴里もとく、居るいねひ狭く  
落葉附也

ひ強き難きとすをうらう一の橋大名に同宗のお  
あきらきの馬鹿多うみのとて此のや疏を有さ  
うあゆのほれ作を能む者も其の名喚と心よりしと  
思ひとくし又やねあるもよきと見う後年  
ゆるめの内は也の三味局とあくまの山へしと  
勿論あはせむかとてお出でま三十数年  
の後こりとて文壇の雅と仰えり其位も藝  
術の名聲も歌りの況ニ演く三弦こちくと  
里人の前と外としの都の間に中と公私現れ  
り身もよき様とてうれと喜びや喜びを以てるの  
能と見る能りとく  
(七月十二日前)

十二

有樂座(數寄屋橋内)に於て開會 (大正五年七月十二日・十三日)  
第百五十二回例會演奏番組

寅題 長唄 三味線 繩子  
第一猿舞 吉住小三藏 吉住小一郎 吉住小登七郎 上杵屋三次郎 大駿 住田又作  
杵屋長三郎 小坂 望月仙右衛門 望月長十郎

# ○大江十

木馬シマツ、形ハタケ、式シマツ、象シマツ、鉢シマツ、大安寺シマツ、起中集シマツ、  
鐵作シマツの文シマツを刻シマツす、鐵作シマツの文シマツを刻シマツす、人シマツの印シマツを控シマツす  
う未だくす、十足シマツぬ味シマツの人シマツの印シマツを控シマツす

ひ強き難をよきう一の精をもて同宗のお  
あくまでも易事多うゆきのとて又神の心魂をもさ  
うあゆのほんに作らばうお頬と心よりしも  
思へるをし又ゆかさりのうとうと身を海争  
めの内は地の三味あらとあらの山へしと  
か命たまはせと見出わるゝハシマリ  
の後この道を走る之煙の雄と仰ぎえり是れよ  
術の巧敏と歌ひゆる火浦二強ともいへ  
里人の間うな立つて都の間へ中て公私取交  
せ貰ふる様をうかがひや甚しきを以てとも  
能と多く能をも

有樂座(數寄屋橋内)に於て開會  
(兩日正午)

大江 十  
秋月の形  
城作の  
うえ

日本橋區滔屋町十五番地  
電話本局一八九番  
振替東京貳參六貳八番

第一	第二	第三	第四	第五
猿舞	汲汲	連獅子	鶯娘	一休禪師
吉吉吉吉 住住住住 小小小小 四一三三 郎郎藏郎	吉吉吉吉 住住住住 小小小小 三十桃四 藏郎次郎	吉吉吉吉 住住住住 小小小小 十次桃三 郎郎次郎	吉吉吉吉 住住住住 小小小小 上 <sup>て</sup> 屋 <sub>よし</sub> 屋 <sub>よし</sub> 屋 <sub>よし</sub> 屋 <sub>よし</sub> 三太郎次一三郎	吉吉吉吉 住住住住 小小小小 登次一三 七郎郎藏
杵杵杵杵 屋屋屋屋 和四改六 三郎次四 郎治郎郎	杵杵杵杵 屋屋屋屋 政六六和 次三郎郎	杵杵杵杵 屋屋屋屋 長三六太 郎郎次郎	杵杵杵杵 屋屋屋屋 長三次太 郎郎次郎	杵杵杵杵 屋屋屋屋 三太郎次一 郎郎郎郎
太鼓大鼓小鼓 望梅望月住月 長勝月田又仙 四次左兵右衛 郎郎吉衛門助	太鼓大鼓同小鼓 望梅望月望月 長勝長仙右衛 四次四郎郎助	太鼓大鼓小鼓 望梅望月住月 長勝長太左兵 郎郎吉衛門助	太鼓大鼓同小鼓 望梅望月住月 長勝長太左兵 郎郎吉衛門助	太鼓大鼓同小鼓 望月長望月住 郎郎吉衛門作

ひ強き難きとすをうもう一橋大手に同宗のわ  
あきらきの馬鹿うめむこと正神のや魂と者き  
うあゆのはれ作と名むる長嶺と心よしと  
思つてこし又やねのものもうとくと身う後年  
加淵<sup>カツタマ</sup>のもの内假想の三味輪と別くの山<sup>カツタマ</sup>べしと  
の後この  
術のう  
里への以  
かく  
能とお  
のまを

○大江十生の造印を歎と號得、木印材檜古  
林恐<sup>シ</sup>正令院修業り陰得<sup>シ</sup>木序<sup>シ</sup>とあると  
き、形<sup>シ</sup>式<sup>シ</sup>鼻<sup>シ</sup>坦<sup>シ</sup>、印<sup>シ</sup>て大安寺<sup>シ</sup>得起中<sup>シ</sup>集<sup>シ</sup>  
織<sup>シ</sup>作<sup>シ</sup>の文<sup>シ</sup>を刻<sup>シ</sup>、藏<sup>シ</sup>心<sup>シ</sup>刻<sup>シ</sup>るの名<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>も久人  
う未<sup>シ</sup>くか<sup>シ</sup>十生故<sup>シ</sup>味<sup>シ</sup>の人<sup>シ</sup>の印<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>



一々固ち概略也印の體  
端と毛と其との故味を有する  
事と又と安中とに就する三と之と  
ととも

此印の持主トモ井上十鶴トモ市  
井の施名トモ有する體質を有する  
毫刻トモ又と毫刻トモ人トモの如くる  
關根二誠太極トモ電トモ也



吉宗より次西行セ月十二  
於其後松雅を蒙送  
は印のつる山未収嘆  
堂譜はし新奇

陸生家

吉珠又志一編

○大概め電の詔ニ考一丁答御風術等ニ承る  
由原(通名本由)と云ふ者也。元うちつに生来本由  
の名前で號す。この出来ると近頃スホトに始む  
き端りて吉珠と仰ぐ。此の米船、うまい船  
漁船等と號してゐる。江戸のある各處の  
漁船等と同様に、船を被ひて船の上に立  
てさしかかる船と車の上階面で乗ること。これはあ  
とまことに、(國)すもあたれの船の船員役員と  
のことを考すも、三重賣さんさん傍の本由の姓  
と何處か出でる。そのときは又船を賣る  
あくまでもう一つ、船を买はれて以て雇ひ

てちつて、九月十日度を主取の重松家や、詮候  
凡流と云ひて、在一件と大花せの又八月三  
十二又往ひ本ゆにまつづらひ。本ゆよりえど  
あはれ此に氣難でて、まことに方々、まうえどえど  
もあらうとのを寧へて行く往一件、天保庚辰  
即ち五六十六又、あつて此を主取  
〇西洋又云ふも、すうじて描すも、流石に形式を  
脱して新しくしてある生きる所をも、このころ  
ばくゆきと毛を絞問のむ。此毛の文書をもつ  
えよしの一二行あさんびと捨てて、詮みする  
内省をもつておせす。もうまくまとまることニツニツと  
たまわせす

犬  
ニヨリ事の連  
下見中

少しづけるあくべしのぶすまう今つて首を掛け  
ミイシと乱房を掛けぬまえど、二親丈が頭をも  
かきぬつてある小手をすり倒くとさうと横み  
片縁、もと抱く込んでへべろく舐めまし、かさのう  
音のえい地音もすくこくと轆かざんと轆  
がさんてハ大花せ起立、又よううくと云  
字うつて、ほつうりと黒い鼻面をあ脇を掛け  
通す御くゆくゆふ柔ふる乳首を掛け、あん娘  
想しキウと吸聞のえ、ハタゞのあ年ひ掛け主

ひりぬれ出すと甘い温のかる亂けか瀼々と  
出でまうと、咽喉へ流れ込み、胸を下る。何とも  
言へずおがいと喉の下を搔き乱す。鼻孔へみ  
附がぬえやが鼻下面に刻りこんであります。奪ふ  
まいとくと、主のものせえと胸と完璧の大駆  
けやつてゐるが、別段奪ふて下さい。手まく

トやうむけたは後身のエリエーテー・レヨン  
と音うど葉を流不こあく。

絶の傷を聞ん御んわつと搔き切る尾根  
ある壁のねじりねじり、斜く切る毛先があ  
る脚の奥に星を埋め入門うとうとねと巻星

く地をく、左上に縮立の鏡を一ミリに  
轟立とまつて、二を引いて上から落して本丸。  
丸を拂りて花火の火を地にしづく迎接され  
る(はる)穂先を送り、すこよして帝社の  
真中へと費うけとばかり抛け上げて、がくく  
塔を構え、株を育て、木を床に連うつて、石の池  
の此方から又渡す橋を左から右く疊り重き  
埋め、だいさうの修築。雨が出来て、亭  
堂を搭き、構を構き、廻廊を構き、曲檜を  
構き、山堵方柱の柱を構ひ、またしも焼  
物をもとと是の費用を切らんやう、構ける

上を往き度りつゝを維持するに走る筋の條  
●ハ一尺一劃と乱すことをもて松原とも一尺  
一劃のうぢを況むこと無く動のこゝる、一尺から  
ぬるに動ひて、動く限りと形を崩す氣  
をがえる。薄不重の義人子

○小田は杜秀と云ふ國岩跋の及第一段を  
焼き断簡改と云ふ事と考る又文  
書の筆味より古の大雅とちがひあると聞  
く、あ人の傳を補ふ資料にえつきべき事  
嘗與孺皮俱來訪余於有斐閣中談笑抵  
牾池生燭前揮毫為余作宣士山圓其神

氣閑逸言若無人而每一木一石成孺皮從上方  
嗟賞之其聲隨畫大小有低昂人以嗟之  
而二生不覺也今北忙之物非特前宣士山  
之比也顧孺皮方觀此時其嗟賞不如更  
以子作如何聲也

平定は暮念

ち其筆之大雅の畫に如彼トドケ  
う母と云ふ又其筆の性癖の一端を  
三観い見かく

○江芸閣の事羽のじちぬち破くちに次の  
故弓腰もす。波濤流爲稿字やうと引と  
かのうとく堅陽を複く引ひおもづり  
又の人うちもよおひう

但之を以帝母也才却久き於我哉一暮伊  
不意我大都九歲乃及才才也之我之  
亦亦嘗不也才也也也也也也也也也也  
知於雖自久波余之身也波我之也也  
才乃人

その毛も、左の毛も、右の毛も、

この事は我々井田の事にあつて  
あることをうなづくのである  
まことに此の事は  
まことに此の事は  
まことに此の事は  
まことに此の事は

御内事の井田家、江戸にいりて居る  
事多々、久々の往来の如き、  
朝の如き

高木一郎の手紙を書いたばかりの朝  
のゆまへ高木の手紙をさかへるよ  
う







